

環状木柱列からみた縄文時代晩期の地域社会

山 本 直 人

はじめに

ここでとりあげる環状木柱列は6・8・10本の柱が直径6～8mの円形に配列されたもので、2本1組の門扉がついているものもある。柱はクリの木が半分にわられたもので、平坦な切断面が円の外側をむき、円弧が内側をむいている。縄文時代晩期に石川県と富山県を中心とした地域に確認されており、時間的にも空間的にもその広がりにはかぎられている。のこっている木柱は地下の部分だけで、たてられた木柱の高さや地上の構造は不明である。また、類似する民俗事例や民族事例が皆無のため、その機能や用途はよくわかっていない。よび方も研究者によってさまざま、**「環状木柱列」**とよぶ研究者もいれば、**「円形木柱列」**や**「ウッド・サークル」**とよぶ研究者もおり、本稿では一般的な**「環状木柱列」**を使用する。

このような環状木柱列は1980（昭和55）年夏に石川県金沢市新保本町チカモリ遺跡ではじめて発見され、1982（昭和57）年から1983（昭和58）年にかけて調査がおこなわれた石川県鳳至郡能都町（現在の鳳珠郡能登町）真脇遺跡においても、同様の遺構が確認された。1987（昭和62）年には新保本町チカモリ遺跡からほぼ東へ2kmの所に位置する金沢市米泉遺跡が調査され、この遺跡においても環状木柱列が検出された。このように環状木柱列は石川県を中心にして1980年代にあいついで発見された遺構で、100年をこえる縄文時代研究においては研究の歴史が比較的浅い考古資料である。また、機能や用途、地上の構造、建造された理由などの諸課題を解明する手がかりがほとんどないため、不明の部分も多い遺構である。

そこで、本稿では以下の3点を目的としている。第一は環状木柱列が建造された年代をあきらかにすることで、ここでは較正年代と土器型式をあきらかにする。第二はそれが建造された背景をあきらかにすることである。これらのことを通して北陸における縄文時代晩期の地域社会像を復元することが第三の目的である。

1. 調査成果の確認

環状木柱列が検出された遺跡について、高田秀樹氏はその特徴をもつ事例は石川・富山・新潟の3県において16遺跡で確認されているとしており（高田ほか2006）、西野秀和氏は富山県と石川県に限定され、12遺跡がかぞえられるとしている（西野2007）。木柱が検出され

ていてそれらが円形にめぐり、確実に環状木柱列と認定できる遺跡は新保本町チカモリ遺跡・真脇遺跡・米泉遺跡・小矢部市桜町遺跡のわずか4遺跡である。他の遺跡は円形になる大型土坑が検出されていたり、数本の木柱が出土していることから研究者が環状木柱列になると推測しているものである。それらの中には確実なものがある反面、不確実なものもふくまれているため、それをどのように判断するかで遺跡総数がかわってくる。そのため遺跡数が研究者によってちがってきている。

ここでは環状木柱列の出土例を集成することが目的ではないので、その存在が確実な4遺跡について発掘調査報告書をもとに環状木柱列の特徴や年代を調査年度順に確認していく。事実報告の記載にあたっては、報告書の表現方法を尊重してそのまま使用するものである。そのため、同じ資料でも遺跡によって表現が異なる場合もある。

(1) 石川県金沢市新保本町チカモリ遺跡

新保本町チカモリ遺跡の旧名は八日市新保遺跡で、縄文時代後期末に位置づけられている「八日市新保式」の基準となる縄文土器が出土している遺跡である。発見された1953(昭和28)年当時、本遺跡は石川県押野村字八日市新保地内に所在し、遺跡名も字名をとってつけられた。その後、1956(昭和31)年に八日市新保遺跡がふくまれた押野村の一部が金沢市に編入され、町名が変更されたことにもなって1980年の第3次調査のときに遺跡名も変更されている。

遺跡は標高6~7mの手取川扇状地扇端部に位置し、扇端部は伏流水の自噴地帯となっている。発掘調査は都市区画整理事業道路建設にともなう事前調査としておこなわれ、1980(昭和55)年4~10月に実施された(南1983)。

検出された木柱根は約350本で、正円形・正方形・長方形の三つの平面プランが確認されている。遺跡の西側をながれる旧中川排水路にちかいほど木柱根の残存状態がよい。正円形プランが重複し、集中する地区が4箇所ほどみとめられる。とくに大型で良好な状態が把握できるのが6X~17X・44Y~54Yの地区で、長方形プランに隣接している。この地区でA環からH環まで8基報告されているが、プランが明確なのはA~D環の4基である。E環・F環の2基は木柱根2本でえがくことのできる環で、G環・H環の2基は存在が推定されるものである。

A環は直径約6.0mで、円形にめぐる9本の木柱根とそれに付設される2枚の板状木柱根から構成され、木柱根はいずれも左右対称となっている。本来は10本の本柱で円形がえがかれていたのが、1本欠落して9本になっている。半截木柱根の弦の長さは71~89cmで、80±4cmのものが多い傾向にある。その厚さは27~35cmで、30cm前後にまとまっている。

B環は直径約5.6mで、8本の本柱根で構成され、欠落はない。半截木柱根の弦の長さは58~68cm、厚さは21~31cmで、20cm代が大半である。

C環は直径8.0mで、4本の本柱根が残存し、そのうちの1本には礎板がしかれている。本来は10本で構成されていたと想定され、木柱根がぬきとられてのこっていない柱穴6基のうち

3基から礎板が検出されている。半截木柱根の弦の長さは70～80cm、厚さは22～32cmである。

D環は直径6.7mで、これも元来は10本で構成されていたと想定されており、4本の木柱根と5基に礎板が残存している。半截木柱根の弦の長さは41～54cm、厚さは15～29cmである。

A～D環の4基は、木柱根は左右対称になるように配置されている。A環とB環はのこり具合がよいので、他より新しいと考えられている。半截された木柱根の円弧面は、いずれも内側をむいている。半截された半円柱状木柱根の弦長や円柱形木柱根の直径は10～80cmの範囲にはいり、60cm以上のものは点数が少なく、20～40cmのものが圧倒的多数をしめている。また、両者の多くはクリ材である。

年代については、報告書（南1983）では明記されていない。

(2) 石川県鳳珠郡能登町真脇遺跡

大きく湾入した入江が富山湾にむけて開口し、その入江奥には真脇川が貫流する沖積低地がひろがっている。真脇遺跡は富山湾にむけて開口する入江奥の沖積低地に立地し、標高は6～12mで、南側は海に面し、東・西・北の三方は山にかこまれている。ここに団体営圃場整備事業が策定され、この事業にかかわる事前調査として1982（昭和57）年に第1次調査が、1983（昭和58）年に第2次調査が実施された。

調査の結果、巨大な環状木柱列がほぼ同じ地点で3基検出され、それぞれA環、B環、C環と呼称されている（加藤1986）。木柱はすべて半截されたクリ材がつかわれており、半截された木柱根はいずれも円弧面を中心にむけて、平坦面を外側にむけて林立している。

A環は直径7.5mになると考えられているが、東半分は調査区外のため不明である。木柱根は6本検出され、東半分を復元して考えると総数は10本であると推測されている。また、A環6と資料番号のつけられた柱根とセットになる位置に、三日月状の木柱根が南側（海側）にむけてひらくように配置されている。柱根には半截されたクリ材が使用されており、最大のものは弦長98.6cm、厚さ37cmである。他は弦の長さが76～93cm、厚さ22～33cmである。

B環は直径6.2mで、円形プラン全体が検出された。木柱根の総数は10本と考えられており、東側で1本欠落すると報告されている。A環とおなじように、薄い三日月状の木柱根2本が対になってあたかも門のようにたち、南むきに開口している。半截された木柱根の弦の長さは38～60cm、厚さ16～24cmで、いずれもクリ材が使用されている。

C環は直径5.3mになると推定されている。木柱根はわずか3本しか検出されておらず、そのうちの2本はクリ材である。また、その弦の長さは38～53cm、厚さ17～18cmをはかる。

年代については、「これらの所属する時期は、掘り方内出土土器で最も新しくかつ豊富である

晩期の第2 2群中屋式期を中心にする時期と考えられる」(加藤1986:23)と記述されている。

また、2本の木柱について炭素14年代測定がおこなわれ、以下のような結果が報告されている(山田1986:33)。

①KSU-631 (B環-4木柱、径約50cm) 2655±25 BP

②KSU-632 (A環-3木柱、径約88cm) 2645±25 BP

(3) 石川県金沢市米泉遺跡

米泉遺跡も手取川扇状地の扇端部に立地し、標高は11m前後である。本遺跡のほぼ西へ2kmの所に新保本町チカモリ遺跡が位置する。調査は都市計画道路の建設にさきだつ事前調査として1987(昭和62)年5~9月に実施され、環状木柱列1基と方形プランの柱根址1基が検出されている。

環状木柱列は調査区中央部北側で検出され、直径5.5mと推定されている(西野1989)。柱6本が円形にめぐる部分とそれに付属する門状の2本の柱から構成され、計8本のうち7本の柱穴に柱根が残存していた。掘り方の中での柱根の位置は、内側によせられている状況がみとめられている。また、7本の柱根のうち5本について樹種同定がおこなわれ、すべてクリであることが判明している(能城・鈴木1989)。遺存状態のよい柱から判断して柱の円弧面は環状木柱列の内側をむき、平坦面は外側をむいている。3本の柱根の大きさは弦の長さ45~49cm、厚さ13~14.5cmである。環状木柱列の内部中央に特異なピットが2基検出されている。そのうちの1基の覆土は焼土をふくみ、焼土の中からサケの骨が検出されている。

年代については、「本遺構の所産時期は、晩期中屋式新の段階と考えられる」(西野1989:55)と報告されている。

(4) 富山県小矢部市桜町遺跡

桜町遺跡は小矢部川と子撫川の合流点の西にひろがり、丘陵裾の河岸段丘上に立地している。国道8号線小矢部バイパスの建設にともなう事前調査として実施され、2000(平成12)年度と2002(平成14)年度に舟岡地区第3調査区でA環とB環の2基の環状木柱列が検出されている(大野ほか2005)。

A環は直径6.2mである。10基の柱穴から構成され、そのうちの8基で柱穴から板状あるいは半截された木柱が検出されており、樹種はすべてクリである。半截された木柱は弧となる側を内側に、弦となる側を外側にむけ、弦の長さは42~60cmである。また、円形の南東部に位置するSK119とSK121の木柱は板状に加工されており、2本1組で門扉状に配置されている。SK119とSK121は円周の外にとりつけられる形態でなく、円周上にならんでいる。

年代については、「柱穴内から出土した最も新しい土器片から晩期中葉の中屋式期と考えられる。なお、SK186出土の柱痕を試料とした放射性炭素年代測定では、2780±40BPの

補正C14年代が得られている」(大野ほか2005:17)と報告されている。

B環も直径6.2mである。8基の柱穴からなり、そのうちの5基から木柱が検出されており、SK186の木柱はA環と共用されている。B環のみ属する4本の木柱は、弦の長さが35~46cmで、樹種はいずれもクリである。SK126とSK117が門扉状に配置され、A環と同様に円周上にならんでおり、門扉状の木柱2本1組が円周上にならんでいるのが桜町遺跡の環状木柱列の特徴となっている。

年代については、「柱穴出土遺物から晩期中葉の中屋式期におさまるものとみられる。切り合い等からA環よりも新しい建物とみられるが、SK126とSK158から出土した柱痕を試料とした放射性炭素年代測定では、それぞれ 2830 ± 40 BPと 2810 ± 40 BPの年代値が得られており、その中央値では、A環の柱痕から得られた年代と新旧が逆転している」(大野ほか2005:18)と報告されている。

(5) 石川県鳳珠郡能登町真脇遺跡

前述のように1983年の第2次調査では環状木柱列が3基確認され、そのうちもっとも大きなA環は西側半分が検出されたにとどまり、東側半分は調査区外であったため未発掘のままであった。そこで2002(平成14)年度から2004(平成16)年度にかけて環状木柱列の全貌を解明する目的で、第2次調査区の東側に調査区を設定し、第7~9次調査が実施された(高田ほか2006)。

調査および検討の結果、A環、B環、C環のほかにD環・E環・F環の3環が検出され、合計6環確認されている。これらの新旧関係については、「第1・2次調査の報告書においてA環との切り合い関係でB環が古く、A環が新しいとの見解が出されて」(高田ほか2006:192-193)おり、木柱根掘り方の切り合い関係からえられた知見と炭素14年代値がほぼ合致していることから、第9次調査で検出された5基のなかで「A環が最も古く位置づけることはできるが、C・D・E・F環の順序は今しばらく検討を要する」とむすばれている。

年代については、環状木柱列が「作られた時期とされる縄文時代晩期中屋式期」(高田ほか2006:193)と記述されている。一方、中村俊夫氏が木柱を試料として加速器質量分析(Accelerator Mass Spectrometry: AMS)による炭素14年代測定をおこなっており、その結果が報告されている¹⁾。それを環ごとに列挙すると以下ようになる(高田ほか2006:184・185・193)。

A環:木柱1	2663 ± 34 BP (NUTA2-6084)
A環:木柱2	2518 ± 34 BP (NUTA2-6085)
A環:木柱3	2665 ± 34 BP (NUTA2-6086)
A環:木柱15	2573 ± 29 BP (NUTA2-6003)
D環・E環共用?:木柱5	2469 ± 33 BP (NUTA2-6089)
D環・E環共用?:木柱7	2504 ± 34 BP (NUTA2-6091)

D環・E環・F環共用? : 木柱8	2441 ± 33 BP (NUTA2-6092)
E環 : 木柱12	2474 ± 29 BP (NUTA2-6990)
F環 : 木柱4	2459 ± 34 BP (NUTA2-6088)
F環 : 木柱6	2410 ± 34 BP (NUTA2-6090)

2. 環状木柱列の建造年代

(1) 相対年代

縄文時代晩期の土器型式編年において、どの土器型式に属するのかを検討していく。

米泉遺跡を調査した西野秀和氏は、環状木柱列の「所産時期は、晩期中屋式新の段階と考えられる」(西野1989:55)とし、その後も「所産時期が判明しているのは真脇遺跡と本遺跡だけで、いずれも晩期中葉の中屋式期に位置付けられる」(西野1994:34)としている。さらには、「開始された時期を含めた細かな段階が捕捉できず、晩期前半の中屋式期での所産が確実視されているに止まる」(西野2007:171)と一貫して中屋式期に属するという立場をとっている。

真脇遺跡第1・2次調査を担当した加藤三千雄氏は、環状木柱列の「所属する時期は、掘り方内出土土器で最も新しくかつ豊富である晩期の第22群中屋式期を中心にする時期と考えられる」(加藤1986:23)という見解を報告書でしめしていた。その後、真脇遺跡の「A・B環の新旧は、遺構の切りあうA環門とB環9でなされたが、その確認ははなはだ曖昧なものであった。次に掘り方内出土土器での検討でも、ほぼこれらが晩期中葉の中屋式期と判断しうる資料を提供したが、近接した時間的関係もまた不明といわざるをえない。(中略)他の柱穴内で検出された土器の多くも縄文晩期中屋式期のものが多いが、なかには下野式期にさがる可能性があるものもあったので留意しておきたい」と考えを少しかえている(加藤1994:20)。

真脇遺跡の第7～9次調査を担当した高田秀樹氏は、環状木柱列の建造年代は縄文時代晩期中屋式期という見解をしめしている(高田ほか2006:193)。

新保本町チカモリ遺跡や米泉遺跡に隣接する野々市町御経塚遺跡は標高が11m前後とやや高いことや地下水位の関係からか、環状木柱列と木柱は検出されていない。吉田淳氏は環状木柱列の配列を参考に土坑やピットなどの遺構の配列について検討をおこない、環状にめぐる大型土坑群を2基(円形建物SB02、ツカダ地区19号建物)確認し、それらが環状木柱列になると推測している(吉田2003)。円形建物SB02は「径6.8mの規模で柱穴は10個になり、(中略)時期は晩期後葉の下野式後半である」(吉田2003:53)と指摘している。また、ツカダ地区19号建物は「径5.8m、柱穴は8個(中略)時期は晩期後半の中屋Ⅱ～下野式である」としている。さらに「円形建物の柱穴から出土した土器には、晩期中屋Ⅱ～下野式が多くみられる」(吉田2003:53)とし²⁾、環状木柱列が中屋Ⅱ式から下野式・長竹式に属する

という考えを提示している。また、吉田淳氏のご教示によれば、出土した土器のほとんどが下野式～長竹式であるという³⁾。

以上のことを整理すると、環状木柱列が建造された時期については二つの考えがあり、一つは西野秀和氏や高田秀樹氏のように中屋式期と考える立場で、もう一つは吉田淳氏のように中屋Ⅱ式～長竹式と考える立場である。

(2) 絶対年代

真脇遺跡と桜町遺跡では木柱を試料にして炭素14年代測定がおこなわれており、炭素14年代と較正年代を検討していく。

まず、真脇遺跡についてみていくと、中村俊夫氏が測定した10点ではもっとも古いものがA環木柱3の 2665 ± 34 BP (NUTA2-6086)で、もっとも新しいものはF環木柱6の 2410 ± 34 BP (NUTA2-6090)である。1986年に山田治氏が報告した2点の測定値、A環3木柱の 2645 ± 25 BP (KSU-632)とB環4木柱の 2655 ± 25 BP (KSU-631)もこの範囲の中にはいつてくる。

中村俊夫氏が測定した炭素14年代はINTCAL98および較正プログラムCALIB Rev. 4.3をもちいて西暦に較正されており、A環木柱3 (2665 ± 34 BP)の較正年代は1標準偏差で $833 \sim 800$ cal BC (100%)、F環木柱6 (2410 ± 34 BP)の較正年代は1標準偏差で $737 \sim 531$ cal BC (28.3%)・ $521 \sim 402$ cal BC (71.7%)と報告されており、較正年代は約 $830 \sim 400$ cal BCとなる。

さらには中村俊夫氏の指導をうけて西本寛氏が詳細な炭素14年代測定を実施している(西本ほか2008)。西本寛氏らは第9次調査(2004年)で検出された5基のなかかでもっとも古いA環の木柱1と木柱2、もっとも新しいF環の木柱4と木柱6、合計4本の木柱を対象にして炭素14年代測定とウイグルマッチングをおこない、その結果から「環状木柱列の形成時期は約 $820 - 490$ [cal BC]の約330年間に収まると考えられる」(西本ほか2008: 87)としている。

中村俊夫氏や西本寛氏が提示した較正年代はクリの木の伐採年代にちかい年代をあらわしており、それがそのまま建造年代になるわけではない。伐採から建造までの年数を加算しなくてはならないが、その経過年数は不明である。本稿では伐採後それほど時間をおかずに建造されたという前提にたち、論をすすめている。

つぎに、桜町遺跡では3点の木柱の炭素14年代測定がおこなわれており、その測定値と2標準偏差の較正年代は以下のように報告されている(大野ほか2005: 35)。

A環: SK186 2780 ± 40 BP (Bete-157579) $1010 \sim 830$ cal BC

B環: SK126 2830 ± 40 BP (Bete-189400) $1100 \sim 900$ cal BC

B環: SK158 2810 ± 40 BP (Bete-189403) $1040 \sim 850$ cal BC

これらの結果から、炭素14年代は $2830 \sim 2780 \pm 40$ BP、較正年代は $1100 \sim$

830 cal BC になることがわかる⁴⁾。

木柱の中心を試料とした場合と外側では年代差が生じることになるが、桜町遺跡の報告では試料にした木柱の部分が明記されておらず、この点が問題となる。こうした場合は木柱の一番外側から試料を採取するのが一般的であることから、そのように採取していると推測して論をすすめている。

(3) 較正年代の土器型式編年上での位置づけ

上記のような真脇遺跡と桜町遺跡の環状木柱列の較正年代が縄文時代晩期の土器型式編年での土器型式に該当するのかを検討していくことにする。

北陸地方においては縄文時代晩期の土器型式が明確な縄文土器に付着した炭化物を試料にして加速器質量分析で炭素14年代測定をおこない、西暦に較正した類例はそれほど多くはない。しかしながら大雑把ながらも各土器型式の較正年代を提示できる状況となっており、2006年11月段階における縄文時代晩期の較正年代を提示している(山本2006)。その後、長竹式の測定例がふえ(工藤ほか2008)、その較正年代を考慮して現在は以下のように考えている⁵⁾。

御経塚式(大洞B式並行)	約1300～約1200 cal BC
中屋式(大洞BC式～大洞C1式並行)	約1200～約900 cal BC
下野式(大洞C2式並行)	約900～約800? cal BC
長竹式(大洞A式並行)	約800?～約500? cal BC

環状木柱列の較正年代と各土器型式の較正年代を対比していくと、真脇遺跡の較正年代は約820～490 cal BCで、下野式の最終末から長竹式となり、ほとんど長竹式といってもよいくらいである。また、桜町遺跡の較正年代は1100～830 cal BCなので、中屋式後半～下野式になる。これらのことを考えあわせると、環状木柱列が建造された較正年代は1100～490 cal BC、土器型式編年では中屋式後半から長竹式となる。これは考古学的な知見とも合致しており、吉田淳氏が指摘する年代を支持する結果となっている。

真脇遺跡では環状木柱列の掘り方内出土土器のほとんどが中屋式であることから中屋式期の所産とされてきたが、木柱のAMS炭素14年代測定と西暦への年代較正によって下野式期末～長竹式期になることがあきらかになった。すなわち、中屋式の包含層の上に下野式期の人びとが環状木柱列を建造し、その結果として柱穴に中屋式の土器片が混入したと推測することができる。また、真脇遺跡ではA環～F環の6基の建造期間が820～490 cal BCの330年間で、桜町遺跡の木柱3本の較正年代は1100～830 cal BCで、真脇のものよりも古いといえる。どれだけ古いのかということが問題になってくるが、桜町遺跡で建造されたあとに300年という空白期間において真脇遺跡で建造されたと考えたよりも、それほど時間をおかずに連続して建造されたと考えの方が適当であろう。さらには、御経塚遺跡の環状木柱列になると推定されている大型土坑から出土している土器のほとんどが下野式から長竹式である。このようなことを考慮すると、環状木柱列の建造年代は下野式期～長竹式期に主体があったと推測することができる。

そして桜町遺跡の環状木柱列の較正年代は中屋式後半～下野式にあたるが、上記のような真脇遺跡での柱穴出土土器と較正年代の関係を考えあわせ、その建造年代は中屋式終末～下野式初頭を想定しておきたい。

3. 環状木柱列建造の背景

最初に、環状木柱列が建造された縄文時代晩期中屋式終末期・下野式期～長竹式期、較正年代では約900～約500 cal BCが日本列島ではどのような時期であったのかをみていく。

北部九州における縄文時代の終焉年代は約900 cal BCと筆者は考えており（山本2007）、それと表裏一体の関係をなす弥生時代の開始年代は約930 cal BCと考えられている（藤尾ほか2005：93）。北陸で本格的に水田稲作農耕が開始されるのは弥生時代前期末の柴山出村式期（約500?～約400? cal BC）あるいは弥生時代中期にはいつてからと推測され、北部九州に伝播した水田農耕稲作が北陸で開始されるまでに約400～約500年かかっていることになる。この約400年間は縄文時代晩期中屋式終末期・下野式期～長竹式期に相当し、約500年間で下野式期～柴山出村式期ぐらいに相当する。

下野式期と長竹式期の水田稲作農耕に関する遺物は断片的であり、わずかにイネの粃圧痕と遠賀川系の壺形土器がみられる程度である。長竹式に属する条痕文の粗製土器に稲粃の圧痕が手取川扇状地に立地する石川県野々市町御経塚遺跡と同町三日市A遺跡で各1点ずつ確認されている（吉田2006）。これらは弥生土器に付着しているイネの粃圧痕に酷似しているが、これらは植物学者や農学者の正式な同定をうけたわけではないのでイネの粃圧痕と断定することはできない。かりにイネの粃圧痕で稲作がおこなわれていたにしても畠稲作か水田稲作かという問題は今後へのこされた課題であり、他地域から粃だけがもちこまれた可能性ものこされている（山本2006）。また、遠賀川系の壺形土器が手取川扇状地でも野々市町粟田遺跡や白山市乾遺跡で出土しており、手取川上流の白山市下吉谷遺跡でも出土している（吉田2003）。壺形土器だけ出土していることから稲粃をいれて贈答品としてつかわれたと考えることができるであろう。

以上のことから、北陸で環状木柱列が建造された約900～約500 cal BC、下野式期～長竹式期というのは、水田稲作農耕に関する情報や物資の一部が交換・流通ネットワークを通じて西日本から北陸の縄文人にもたらされていた時期と把握することができる。

つぎに、縄文時代晩期の社会と縄文時代から弥生時代へ移行期における農耕についての渡辺仁氏の見解をみていく。

渡辺仁氏は縄文時代の社会は狩猟の特殊化、狩猟系家族と漁撈系家族の分化という生業分化によっておこった縄文式階層化社会で、狩猟が富と威信の源泉となったことによって地域社会内部に狩猟系家族と非狩猟系家族の間に上下の階層差と貧富差を生じたとしている（渡辺1990）。環状木柱列に関しては、これほどの高度大型技術が真脇遺跡とチカモリ遺跡の「2遺跡で代表

されるような小地域の発明でしかもその地に限られた伝統であるとは考えられない。(中略) 単なる若干の個人や若干の地域社会の範囲で生みだし伝統として維持できるような単純小型の文化要素ではないからである」(渡辺1990:107)と評価し、環状木柱列のような大型非実用施設とそれにみられる大型技術をもった縄文人の「社会が狩猟採集民としては特殊な階層社会であったことを暗示するものといえよう」(渡辺1990:108)と自説を補強する出土例として利用している。

縄文・弥生移行期の農耕については、その社会の「構造的変化の根本要因は農耕化で(中略)その農耕化過程で主役を演じたのが、縄文社会のエリートとしての首長と長老群即ち退役狩猟者群であったことである。地域社会の伝統の管理・運営者としてのこの指導者達が、農耕システムのソフトウェアと交易の実権を握ったことによって、日本における農耕化と農耕社会の発展に主導的役割を果たした」とのべ(渡辺1990:2-3)、「稲作農耕を導入するや驚くべき速さで農耕社会化を遂げ、文明への階段をかけのぼった日本古代社会の歴史の根は、弥生社会どころか更に深く縄文社会に求めなければならない」と指摘している(渡辺1990:4)。また、「我が国への農耕(水稲農耕)導入に関して主役を演じたのは、晩期縄文社会の富者層即ち狩猟者層にはかならない。特に革新者 innovators として主導的役割を果たしたのが、地域社会の指導者層—首長と長老達(退役狩猟者達)とみられる」(渡辺1990:148・150)と評価している。

くりかえしになるが、日本列島では水田稲作農耕が930cal BC ごろに北部九州に伝播して北陸・東海に伝播するまでに約400～約500年の年数を要しており(山本2007)、おどろくほどの速さで農耕社会化してはいないし、急速に古代化もしてはならず、渡辺仁氏が1990年にしめた考えは現在の研究水準や年代観からみとめがたいものとなっている⁶⁾。かりに渡辺仁氏が指摘するように縄文晩期社会が縄文式階層社会で、首長と長老達(退役狩猟者達)が地域社会の指導者層であったにせよ、北陸で水稲農耕を受容するのに約400～約500年ついやした理由は、そうした指導者層が水田稲作に基盤をおいた生活システムという新しいものを拒絶し、従来とは異なる価値体系の受容を拒否したためであると筆者は考えている。北陸という地域社会の指導者層が従来への価値観を守り、狩猟民、採集民、漁撈民としての自分たちの存在を再確認し、その儀礼を強化しようとして建造したのが環状木柱列であると考えている。新たな生産システムや価値体系に対抗し、地域共同体の紐帯を強めるために建造した装置が環状木柱列であると考えている。

渡辺仁氏が縄文時代晩期の地域社会の指導者層が主体となって水稲農耕を積極的にうけいれたと考えているのに対し、筆者はそうした指導者層が水稲農耕のうけいれを拒絶し、そのために北部九州に伝播した水田稲作農耕が北陸でうけいられるまで約400～約500年の年数がなかったと推測している。

4. 結論と今後の課題

北陸で環状木柱列が建造された年代は縄文時代晩期中屋式終末期・下野式期～長竹式期で、較正年代では約900～約500 cal BCとなり、930 cal BC ごろに北部九州に伝播した水田稲作農耕がちょうど西日本に拡大している時期にあたる。北陸の地域社会の指導者層はそうした水田農耕に基盤をおいた生活システムを拒絶し、狩猟民、採集民、漁撈民としての儀礼を強化して地域共同体の紐帯を強めるために環状木柱列を建造し、新たな生活システムや価値体系に対抗していったと推察している。そのために北部九州に伝播した水田稲作農耕が北陸でうけいられるまで約400～約500年の年数がかかったと考えている。

つぎに今後の課題についてであるが、喫緊の課題は二つあると考えている。

一つは環状木柱列が出現する年代をあきらかにすることである。本稿ではその年代を約900 cal BC を想定しているが、あくまで状況証拠をもとにした想定にしかすぎず、早急にあきらかにしなければならない課題である。それを解明する鍵をにぎっているのが小矢部市桜町遺跡や金沢市米泉遺跡で検出された環状木柱列である。しかしながら、両遺跡の木柱はすでにポリエチレングリコールで保存処理されてしまっており、炭素14年代測定が困難な状況である。現在、中村俊夫氏らは真脇遺跡の第2次調査（1983年）のときに出土し、保存処理された木柱の炭素14年代測定とウイグルマッチングをすすめている。これらは環状木柱列A環のもので、第9次調査（2004年）で検出され、AMS炭素14年代測定されたものと同一の環状木柱列となる。両者を比較することによってポリエチレングリコールの影響を考慮したり、本来の較正年代に換算できるようになることが期待され、その分析方法の確立がのぞまれている。

もう一つは環状木柱列の機能や用途の解明である。北アメリカの狩猟採集民の民族事例にくわしい渡辺仁氏も指摘していないくらいなので、民族誌関係ではほとんど手がかりはないのかもしれないが、再調査してみる価値はあるかもしれない。

おわりに

本稿をまとめるにあたり、大塚達朗氏、大野淳也氏、工藤雄一郎氏、高田秀樹氏、布尾和史氏、吉田 淳氏には資料の提供をうけ、お世話になりました。末筆ながら心より謝意を表する次第です。

註

- 1) 方形木柱列の4本の木柱（9、10、11、14）の炭素14年代と較正年代は以下のとおりである。

木柱9	2891 ± 34 BP (NUTA2-6093)
木柱10	2936 ± 34 BP (NUTA2-6094)
木柱11	2874 ± 34 BP (NUTA2-6096)

木柱 14 2934 ± 29BP (NUTA2-6992)

方形木柱列は環状木柱列とは建造された年代が大きく異なることが判明したので、本稿では除外し、環状木柱列のみに焦点をあてている。

- 2) 吉田 2003 文献では吉田淳氏は下野式を前半と後半にわけて記述しており、下野式前半が狭義の下野式、下野式後半が長竹式に該当する。
- 3) 吉田 2003 文献では吉田淳氏は下野式を前半と後半にわけて記述しており、下野式前半が狭義の下野式、下野式後半が長竹式に該当する。
- 4) 工藤雄一郎氏の協力をえて IntCal04 と OxCal v4.0.5 をもちいて 3 点の炭素 14 年代を校正した。
2 標準偏差 (95.4%) で校正すると以下のようになり、その年代は約 1120 ~ 830 cal BC で、報告されたものほとんどかわらない。

A 環: SK 186 1019 (95.4%) 829 cal BC

B 環: SK 126 1124 (95.4%) 897 cal BC

B 環: SK 158 1110 (0.5%) 1104 cal BC、1082 (1.5%) 1065 cal BC、1056 (93.5%) 843 cal BC
1 標準偏差 (68.2%) では以下のようになり、校正年代は約 1040 ~ 860 cal BC にせままる。

A 環: SK 186 997 (64.8%) 896 cal BC・867 (3.4%) 860 cal BC

B 環: SK 126 1039 (2.2%) 1034 cal BC、1029 (66.0%) 923 cal BC

B 環: SK 158 1009 (68.2%) 912 cal BC

- 5) 下野式 (大洞 C 2 式並行) と長竹式 (大洞 A 式並行) の境界年代が明確になっているわけではなく、暫定的に 800 ? cal BC としているが、小林謙一氏が東北地方の大洞 C 2 式と大洞 A 式の境界年代を 780 cal BC (小林 2008) としていることを考えあわせるとおおむね妥当な年代と考えることができる。
- 6) この点については拙稿ですでのべている (山本 2007)。

縄文時代から弥生時代への移行期に関する従来の説では、縄文晩期の社会は呪術が支配し、発展性をうしなった停滞的な社会で、労働用具が発達して乱獲がすすみ、矛盾が進行してゆきづまっていた。そうした状況のときに、北部九州につたわった水田稲作農耕は食料資源の枯渇していた西日本に急速にひろがったという図式で、縄文時代から弥生時代にかけての水田稲作のひろがり説明されてきた。

水田稲作がひろがる年数について、佐原真氏と金関恕氏は、弥生前期土器である遠賀川式土器が太平洋側では愛知県西部、日本海側では丹後まで分布することから、弥生文化は愛知県西部 (尾張) まで急速にひろまり、弥生「前期文化の伝播に要した期間が、長くとも半世紀程度」であったとのべている (佐原・金関 1975: 38)。近年でも、寺沢薫氏は「遅くとも前 5 世紀には玄界灘沿岸地域に定着した水田稲作は、約百年のうちには西日本のおもだった平野部に広がり、その後百数十年で本州の最北端にまで到達した、というのが大方の見解」であるとしている (寺沢 2000: 026)。

こうした年代観のもとで、日本列島においては水稲農耕という食糧生産の開始から古代国家の形成に要する年数がひじょうに短く、農耕社会の成立から古代国家が形成されるまでの「古代化」の速さが世界をみわたしても類をみないことを、佐原真氏は強調している (佐原 1987)。しかしながら、前述のように弥生時代の開始年代が前 930 年ごろに遡上することが確実になってきており、前方後円墳の出現までの約 1200 年、奈良時代まで約 1640 年かかっていることになる。列島での「古代化」の速さは佐原真氏が強調するほどのものではないことになり、対比されている諸外国の例とかわらないことになる。

また、都出比呂志氏は日本の初期農耕社会の特質として、(1) 耕地開発と階級社会の形成の急速さ、(2) 小経営と家族の存在形態、(3) 環濠集落と首長の居館と古代都市の 3 点を指摘している (都出 1989: 490-493)。しかし、これらのうちの (1) 耕地開発と階級社会の形成の急速さという特質は、同上の理由によって成立しなくなる。

引用文献

大野淳也ほか、2005、『富山県小矢部市桜町遺跡発掘調査報告書』小矢部市埋蔵文化財報告書第 55 冊、小矢部市教育委員会：小矢部。

- 加藤三千雄、1986、「晩期の巨大水柱列」『石川県能都町真脇遺跡』、23-28頁、能都町教育委員会・真脇遺跡調査団：石川県能都町。
- 加藤三千雄、1994、「石川県能都町真脇遺跡の巨木遺構」『考古学ジャーナル』377、18-24頁、ニューサイエンス社：東京。
- 工藤雄一郎・小林謙一・山本直人・吉田 淳・中村俊夫、2008、「石川県御経塚遺跡から出土した縄文時代後・晩期土器の年代学的研究」『第四紀研究』第47巻第6号、409-423頁、日本第四紀学会：東京。
- 小林謙一、2008、「縄文時代の暦年代」『歴史のものさし』縄文時代の考古学2、257-269頁、同成社：東京。
- 佐原 眞・金関 恕、1975、「弥生文化の発展」『稲作の始まり』、38-54頁、講談社：東京。
- 高田秀樹ほか、2006、『石川県能登町真脇遺跡2006』、能登町教育委員会・真脇遺跡調査団：石川県能登町。
- 都出比呂志、1989、『日本農耕社会の成立過程』、岩波書店：東京
- 寺沢 薫、2000、「稲作伝来」『王権誕生』日本の歴史02、21-66頁、講談社：東京。
- 西野秀和、1989、「環状木柱列」『金沢市米泉遺跡』、53-55頁、石川県立埋蔵文化財センター：金沢。
- 西野秀和、1994、「金沢市米泉遺跡の環状木柱列」『考古学ジャーナル』377、31-37頁、ニューサイエンス社：東京。
- 西野秀和、2007、「環状木柱列」『心と信仰』縄文時代の考古学11、171-177頁、同成社：東京。
- 西本 寛・高田秀樹・中村俊夫、2008、「 ^{14}C 年代測定による石川県真脇遺跡出土環状木柱列の年代決定」『名古屋大学加速器質量分析計業績報告書(XIX)』、85-89頁、名古屋大学年代測定総合研究センター：名古屋。
- 能城修一・鈴木三男、1989、「米泉遺跡出土木材の樹種」『金沢市米泉遺跡』、263-277頁、石川県立埋蔵文化財センター：金沢。
- 藤尾慎一郎・今村峯雄・西本豊弘、2005、「弥生時代の開始年代」『総研大文化科学研究』創刊号、71～96頁、総合研究大学院大学文化科学研究科：神奈川県葉山町。
- 南 久和、1983、『金沢市新保本町チカモリ遺跡一遺構編一』金沢市文化財紀要34、金沢市教育委員会・金沢市埋蔵文化財調査委員会・金沢市新保本町第1土地区画整理組合：金沢。
- 山田 治、1986、「真脇遺跡出土の巨大木柱列の ^{14}C 年代測定」『石川県能都町真脇遺跡』、33頁、能都町教育委員会・真脇遺跡調査団：石川県能都町。
- 山本直人、2006、「御経塚遺跡と地域社会」『野々市町史』通史編、34-47頁、石川県野々市町。
- 山本直人、2007、「東海・北陸における弥生時代の開始年代」『縄文時代から弥生時代へ』新弥生時代のはじまり第2巻、35-44頁、雄山閣：東京。
- 吉田 淳、2003、「扇状地の拠点集落－御経塚遺跡－ 集落の構造と遺構」『野々市町史』資料編1（考古／古代・中世）、50-58頁、石川県野々市町。
- 吉田 淳、2006、「縄文から弥生へ」『野々市町史』通史編、48-51頁、石川県野々市町。
- 渡辺 仁、1990、『縄文式階層化社会』人類史叢書11、六興出版：東京。

Abstract

On the Community Considered by the Wood Circles of the Final Jomon Period

Naoto YAMAMOTO

The wood circles are found during Final Jomon Period in the Noto peninsula. It locates in the central part of Japanese Islands and it protrudes into the Sea of Japan.

The wood circles consist of 6, 8 or 10 poles arranged in a circular configuration of 6 to 8 meters in diameter, having a gate-like structure. These poles are made of large chestnut logs which are split in half, and their cut surfaces are always oriented outward. The wood circles are dated from c.900 cal BC to c.500 cal BC. The upper structure was almost completely decayed and lost and we excavated the remains of logs in the underground. So the upper structure is not known if it was a part of a building or only columns. Some archaeologists suppose it to be a building for residential, ceremonial or monumental purposes. It remains inconclusive.

Although the wood circles have been documented at 16 sites, the 12 of them included large pits arranged in a circular configuration without poles or only wooden poles without pits. Absolute evidence of wood circles is found only at 4 sites; Chikamori site, Mawaki site, Yonaizumi site and Sakuramachi site.

The people of Jomon Period were hunter-gatherer-fishers. According to the recent study, it was introduced the cultivation of rice in paddy field from the Korean peninsula in c.930 cal BC. It is supposed this information might be reached to the people in the Noto peninsula through some kind of network. The date of constructing the wood circles corresponds with the period when the paddy rice growing was introduced to the northern Kyusyu and distributed to the western Japan. So, it is not difficult to imagine the Jomon people of the Noto peninsula needed to strengthen integration of their local communities against the new system of subsistence and ideology. The construction of the wood circles could function for this purpose.